

「問題を発見する力」は1問の出題で、都や区の平均点を上回り、平均正答率は81.6%である。問題を解く前提として、2枚の写真を比較して、相違点を見つける力が必要とされる。30年前の写真の事実(電線があること。ガードレールがあること。川へ下りる階段のないこと等。)と現在の写真の事実(電線なし。木の冊に変更。川へ下りる階段の設置等)を認識した上で、問題文の整合性や矛盾点を見出さなければならない。一つ一つの相違点を正確に見つけることができたのは、社会科や理科の写真やイラストの相違点探しの学習の積み重ねであると考えられる。共通性、類似性、差異、意外性、普遍性などの関係に着目して考える学習場面を設定することが大切である。

「見通す力」は1問の出題で、平均正答率は、61.2%であり都や区の平均を若干上回った。誤答の背景には、「バス降車時より1時間以内であれば次に乗るときは1回限り無料である。」という運賃割引制度の条件を、十分に把握できなかったことにある。問題を解いていく上で、諸条件を総合的に考えなければならないのだが、バスに乗る回数について頭が行ってしまい、運賃割引制度を忘れ、乗車した回数と一日券を比較し「1」の選択肢を選択してしまった。(約16%の児童がこの選択肢を選択した)見通す力を育成するためには、根拠を明らかにした上で、結果を予想することができるようにすることが大切である。単に結果のみを考えるのではなく、「以前に～したことがあります。だから、～になるだろう。」というように根拠を明らかにして情報交換し、考えを広めようという指導を行うことが大切である。

「適用・応用する力」は

「理科(乾電池と豆電球のつなぎ方の知識と実験結果から考える問題)」、

「国語(話し合いのルールに基づいて、話し合いを進めることができたかを確認する問題)」

「社会(地図の等高線の間隔が狭いと急斜面、広いと緩やかな斜面と方位の知識を問う問題)」、

「算数(家庭で1日使用する水道量を加算し、それを容積200ℓの浴槽何杯分に換算して考える問題)」

以上4問の出題で、平均正答率は50.7%であり、都平均を3.8%、区平均を1.5%下回った。正答率が50%を「理科と社会」で下回った。都や区の平均でも同様の傾向を示している。(正答率「理科」都58.0% 区54.7% 本校45.6% 「社会」 都47.7% 区43.8% 本校43.7%) 「国語」正答率 都47.5% 区49.2% 本校50.5% 都・区平均を上回り、「算数」 都64.7% 区61.2% 本校63.1%と区平均を上回った。

児童の日常生活の中から理科では、「乾電池や豆電球の性質の把握、3段論法の活用。(AはBより強い。BはCより強い。ゆえにA B Cの中ではAが一番強い。)」社会では、「地図の等高線の基本的な仕組みについての指導の強化。」国語では、「話し合い活動におけるルールの確認。」算数では、「容積を加算する際には、どのような単位でまとめるとよく、また、別の容器にどのように換算することができるのか。」という指導の工夫が必要である。

「意思決定する力」は1問の出題で、平均正答率は48.5%である。問題では一日の活動を諸条件の中から決定する力を求められている。学習の場面において、与えられた情報を分析・吟味、検討する力が必要である。「母親の出した条件(昼食前に1時間かけ買い物をする。2時間洗濯をしたうえで洗濯物は干し終わってから5時間以上干す等)、本人の行動したい条件(留守中2時間以上の勉強。30分の読書。1時間30分継続してのビデオ観賞等)を把握し、それらを関連付けて予定表を吟味する必要があるのではないかと思う。様々な条件の中から、自分で適切に処理し、意思を決定する訓練を設定することが大切である。

「表現する力」は1問の出題で、平均正答率は73.8%であり都の平均点よりも1.7%と、やや上回っている。「資料を読み取り、『迷子を発見しその後自分がどのように行動したのか』を説明すればよいのかを表現させる問題」である。いつ迷子に遭遇し、その後の対応を順序よく表現する力を問う問題である。事実と反する条件(おもちゃ売場で親を捜した。おもちゃ売場ではぐれた。洋服売場で発見した)を選んだ児童が11.7%いた。相手意識や目的意識をもたせ、どのように表現すればいいのか考えることが大切である。相手に対してわかり易く、適切な表現で話したり、記述したりすることができるように、日常の「話す・聞く」の学習で、相手や目的に合った表現を指導し、改善・充実を図っていく必要がある。

平成20年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の結果について

東京都教育委員会が、平成21年1月15日に都内の小学校5年生を対象に実施した「児童・生徒の学力向上を図るための調査」につきまして、本校の「確かな学力」の定着を図るための調査ならびに「確かな学力」の伸長を図るための調査結果の考察がまとまりましたのでお知らせします。

1. 「確かな学力」の伸長を図るための調査の評価の観点

評価の観点	
問題を発見する力	与えられた情報を分析・考察して、その状況において解決が必要となる問題を見付けることができる。
見通す力	与えられた情報を分析、考察して、問題を解決するための方策や結果の予想を考えることができる。
適用・応用する力	既にもっている知識・技能等を活用するとともに、新たな分析や判断も加えて問題を解決することができる。
意思決定する力	複数の条件を理解し、その条件に適切に対応して判断し、問題を解決することができる。
表現する力	問題の結論やその根拠を明確に表現したり、問題の解決の方法(道筋)を適切に表現したりすることができる。

2. 「問題解決能力」観点別平均正答率(都・区・本校)

全 体 平 均		都平均	区平均	本校平均
		60.2	58.3	58.5
観 点 別 結 果	問題を発見する力	81.5	81.3	81.6
	見通す力	59.6	58.5	61.2
	適用・応用する力	54.5	52.2	50.7
	意思決定する力	50.6	47.5	48.5
	表現する力	72.1	70.7	73.8

3. 「問題解決能力」学力調査考察

全体の平均正答率は58.5%であり、区の平均よりも0.2%上回り、都より1.7%下回っている。「問題を発見する力」、「見通す力」、「表現する力」の調査結果は都や区を上回っているのに対し、「適用・応用する力」「意思決定する力」の結果は都の平均よりも下回っている。日常の授業に対して、興味関心をもち、学習意欲が高いのがよい点であるが、集めた情報をどのように整理しまとめてゆくかが課題である。無答のまま終わることなく必ず解答しようとする意欲が感じられた。

今後も、問題解決的な学習を数多くの場面で取り入れ、児童に「課題を追究する楽しさ」「考える楽しさ」「お互いの情報を発信し合い考えを広め深める喜び」や「わかる喜び」を実感させたいと思う。